

## Invariant Subspaces

東北大 教養 大野 芳 希

函数解析の函数論への応用として単位円板上の Hardy 族  $H^p$  の講論がなされてゐる。この函数論の一般の compact 空間への抽象化とは別に Hilbert 空間の vector, 或は von Neumann 代数の元、特に有限次元の行列を値として持つ様な函数の Hardy 族の研究が最近あらわれてゐる。前者は Hilbert 空間上の作用素に対する不変部分空間の問題とも関連しており [3, 4]、後者は非可換積分論への函数環の理論の応用と見ることも出来る [1]。こゝでは前者について最近の結果を紹介する。今の所函数環の理論が明白にあらわれてゐるわけではないが、問題のとりえ方その他に、その考え方が非常に有効である。以下のいくつかの結果は函数環の立場で拡張されてゐる [5, 12]。

§ 1 Wiener の定理と Beurling-Lax の定理  $X$  を単位円周、 $dx$  を  $X$  上の (正規化した) Lebesgue 測度、 $X$  を  $X(e^{i\theta}) =$

$e^{i\theta}$  で定義された  $X$  上の函数とする。  $\mathcal{H}$  を可分 Hilbert 空間とし、  
 $\mathcal{H}$  の orthonormal basis  $\{e_j\}_{j=1}^{\infty}$  とする。

$L^2_{\mathcal{H}}$  は  $X$  上の弱可測な  $\mathcal{H}$ -値函数の norm

$$\|F\|_2 = \left\{ \int \|F(e^{i\theta})\|_{\mathcal{H}}^2 d\sigma \right\}^{1/2}$$

が有限なもの全体の作る Hilbert 空間とする。 Hardy 族  $H^2_{\mathcal{H}}$  は  
 $H^2_{\mathcal{H}} = \left\{ F \in L^2_{\mathcal{H}} \mid F = \sum_{j=1}^{\infty} f_j e_j, f_j \in H^2(\nu_j) \right\}$  ( $= \left\{ F \in L^2_{\mathcal{H}} \mid F(e^{i\theta}) \sim \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n e^{in\theta}, \varphi_n \in \mathcal{H} \right\}$ ) と定義する。

$X$  上 a.e. で定義された、 $\mathcal{H}$  の閉部分空間を値として持つ線形函数は値域函数という。 a.e. で一致する値域函数は同一のものを見出す。 値域函数  $J$  が可測であるとは  $\mathcal{H}$  から  $J(e^{i\theta})$  の射影  $P(e^{i\theta})$  が作用素の意味で弱可測なことをいう。 可測な値域函数  $J$  に対して  $\mathcal{M}_J = \{ F \in L^2_{\mathcal{H}} \mid F(e^{i\theta}) \in J(e^{i\theta}) \text{ a.e. } \}$  と定義する。

$L^2_{\mathcal{H}}$  の閉部分空間  $\mathcal{M}$  が invariant であるとは  $X\mathcal{M} \subset \mathcal{M}$  なることをいう。 特に  $X\mathcal{M} \subset \mathcal{M}$  なるとき  $\mathcal{M}$  は simply invariant であるという。  $X\mathcal{M} = \mathcal{M}$  なるとき  $\mathcal{M}$  は doubly invariant であるという。

定理 1 (Wiener)  $L^2_{\mathcal{H}}$  の doubly invariant subspace  $\mathcal{M}$  は

$$\mathcal{M} = \mathcal{M}_J$$

の形である。 此処で  $J$  は可測な値域函数で一意的である。

定理 2 (Beurling-Lax)  $L^2_{\mathcal{H}}$  の simply invariant subspace  $\mathcal{M}$  は

$$\mathcal{M} = u H^2_{\mathcal{H}} \oplus \mathcal{M}_J$$

の形である。 此処で  $J$  は可測な値域函数、 $u$  は  $X$  上の可測な作

用素函数で値は Hilbert 空間  $\mathcal{H}$  から  $\mathcal{H}$  への isometry. その値域は a.e. で  $J$  と直交する様なものである. (この  $\mu$  もある意味で一意的である(命題 7 参照).)

$L^2_{\mu}$  の simply invariant subspace  $\mathcal{M}$  に対して  $\bigcap_{n=0}^{\infty} \mathcal{X}^n \mathcal{M} = \{0\}$  と存在するとき  $\mathcal{M}$  は pure であるという. このとき定理 2 の表現は  $\mathcal{M} = \mathcal{U}H^2_{\mu}$  と存在. 又  $\{F_n\}_{n=1}^{\infty} \subset \mathcal{M}$  が存在して a.e. で  $\{F_n(e^{i\theta})\}$  が  $\mathcal{H}$  を span するとき  $\mathcal{M}$  は full range を持つという.

定理 3 可測値域函数  $J$  が定数次元である. 即ち  $\dim J(e^{i\theta}) = N < \infty$  a.e. 又は  $\dim J(e^{i\theta}) = \infty$  a.e. である必要十分条件は pure な simply invariant subspace  $\mathcal{M}$  が存在して,  $\mathcal{M} \in$  含む最小の doubly invariant subspace を定理 1 で表現したときの値域函数が  $J$  であることである.

## § 2 解析的値域函数

Bourling-Lax の定理に表われる二つの函数に注目する. 可測な値域函数  $J$  が解析的であるとは  $\{F_n\}_{n=1}^{\infty} \subset H^2_{\mu}$  が存在して a.e. で  $\{F_n(e^{i\theta})\}$  の closed linear span が  $J(e^{i\theta})$  となることである.

定理 4 値域函数  $J$  が解析的なら  $\{E_n\}_{n=1}^{\infty} \subset H^2_{\mu}$  を適当にとつて a.e. で  $\{E_n(e^{i\theta})\}$  が  $J(e^{i\theta})$  の正規直交基になる称にできる. 従って  $J$  は定数次元である.

解析的値域函数に対して次ぎの称を問題を考へることができる [3].

問題 (1)  $J$  が解析的なら  $J^+$  も解析的か. 又そうなることが出来るか.

(2) 解析的値域函数の和や共通部分は亦解析的か.

(3)  $\cap$  解析的な値域函数を同様に定義したとき, 解析的値域函数  $J$  が亦  $\cap$  解析的に在り得るか. 又  $J^+$  は  $\cap$  解析的か.

解析的値域函数の可付番和が解析的なることは容易に分る.

これらの問題に関して *Carburn* [2] がいくつかの回答を与えていす.

定理 5 解析的値域函数  $J$  が有限次元なら  $J^+$  は  $\cap$  解析的である ( $\dim \mathcal{H} = \infty$  でもよい).

系 6  $J, K$  が有限次元の解析的値域函数なら  $J \cap K$  も解析的.

(注意)  $\dim \mathcal{H} = \infty$  とする. (i) 解析的値域函数の共通部分は解析的であるとは限らなす. (ii)  $J^+$  が一次元の解析的値域函数であるか,  $\cap$  解析的でない解析的値域函数  $J$  が存在する ([2], [3]).

### § 3 内部函数

$U$  が unitary 函数であるとは  $U$  が  $X$  上の可測な作用素函数で a.e. で  $U(e^{i\theta})$  が  $\mathcal{H}$  上の unitary 作用素であることである.

unitary 函数  $U$  に対して  $U\mathcal{H}_{\text{re}}^2 \subset \mathcal{H}_{\text{re}}^2$  なるとき  $U$  を内部函数という. full range を持つ  $\mathcal{H}_{\text{re}}^2$  の invariant subspace  $\mathcal{M} \in U\mathcal{H}_{\text{re}}^2$  と表現するときは  $U$  は内部函数である.

命題 7  $u, v \in \text{unitary 函数}$  とする.

$$(1) \quad uH_{\mathcal{H}}^2 = H_{\mathcal{H}}^2 \Leftrightarrow u: \text{unitary const.}$$

$$(2) \quad uH_{\mathcal{H}}^2 \subset vH_{\mathcal{H}}^2 \Leftrightarrow v^*u: \text{内部函数}$$

unitary 函数  $u, v$  に対して  $uH_{\mathcal{H}}^2, vH_{\mathcal{H}}^2$  を含む最小の simply invariant subspace  $uH_{\mathcal{H}}^2 \vee vH_{\mathcal{H}}^2$  が  $wH_{\mathcal{H}}^2$  と表われるとき  $w = u \wedge v$  と定義する. 又  $uH_{\mathcal{H}}^2 \cap vH_{\mathcal{H}}^2 = wH_{\mathcal{H}}^2$  が full range であるとき  $w = u \wedge v$  と定義する. 更に次ぎの符号記号を用いる.

$${}^*N_{\mathcal{H}} = \{u^*v \mid u, v: \text{内部函数}\}, \quad N_{\mathcal{H}}^* = \{uv^* \mid u, v: \text{内部函数}\}$$

命題 8 (1)  $u \wedge v: \text{存在} \Leftrightarrow u^*v \in N_{\mathcal{H}}^*$

$$(2) \quad uvv: \text{存在} \Leftrightarrow u^*v \in {}^*N_{\mathcal{H}}$$

証明. (1) (イ)  $uH_{\mathcal{H}}^2 \cap vH_{\mathcal{H}}^2 = wH_{\mathcal{H}}^2$  ( $w: \text{unitary}$ ) と  $uH_{\mathcal{H}}^2, vH_{\mathcal{H}}^2 \supset wH_{\mathcal{H}}^2$  故命題 7 から  $u^*w, v^*w$  は内部函数. このとき  $u^*v = u^*w(v^*w)^* \in N_{\mathcal{H}}^*$

(ロ)  $u^*v = \sigma \tau^*$  ( $\sigma, \tau: \text{内部函数}$ ) とすると  $u\sigma H_{\mathcal{H}}^2 = v\tau H_{\mathcal{H}}^2 \subset uH_{\mathcal{H}}^2 \cap vH_{\mathcal{H}}^2$ . 従って  $uH_{\mathcal{H}}^2 \cap vH_{\mathcal{H}}^2$  は full range であるから  $u \wedge v$  は存在する. (2) も同様である.

定理 9  $\dim \mathcal{H} < \infty$  のとき  $N_{\mathcal{H}}^* = {}^*N_{\mathcal{H}}$

証明.  $\sigma \in {}^*N_{\mathcal{H}}$ . 即ち  $\sigma = u^*v$  ( $u, v: \text{内部函数}$ ) とする.

$u$  の余因数行列の転置行列を  ${}^t u$  とすれば  ${}^t u = (\det u) \cdot u^{-1}$  から

$$(\det u) u^{-1} H_{\mathcal{H}}^2 \subset H_{\mathcal{H}}^2, \text{ 即ち } (\det u) H_{\mathcal{H}}^2 \subset u H_{\mathcal{H}}^2. \text{ 従って } (\det u)(\det v) H_{\mathcal{H}}^2$$

$\subset u H_{\mathcal{H}}^2 \cap v H_{\mathcal{H}}^2$  故に  $u \wedge v$  は存在する. 命題 8 により  $\sigma =$

$u^*v \in N_{\mathcal{H}}^*$ . 逆向きの包含関係を示す.  $K_{\mathcal{H}}^2 = \{F \in L^2_{\mathcal{H}} \mid F(e^{i\theta}) \sim \sum_{n=-\infty}^{\infty} \varphi_n e^{in\theta}, \varphi_n \in \mathcal{H}\}$  とおく.  $K_{\mathcal{H}}^2$  は  $H^2_{\mathcal{H}}$  と類似の性質を持つ.

unitary 函数  $\bar{u}$  が 共役内部函数であることと  $\bar{u}K_{\mathcal{H}}^2 \subset K_{\mathcal{H}}^2$  で定義すれば今までの議論と平行に  $\dim \mathcal{H} < \infty$  のとき, 共役内部函数  $\bar{u}, \bar{v}$  に対して  $\bar{u}^*\bar{v} = \bar{\pi}\bar{\sigma}^*$  ( $\bar{\pi}, \bar{\sigma}$ : 共役内部) と書ける. [ $u$ : 内部函数  $\Leftrightarrow u^*$ : 共役内部函数] 故, 今の場合

$$uv^* = u^{**}v^* = \bar{\pi}\bar{\sigma}^* = \bar{\pi}^{**}\bar{\sigma}^*$$

$\bar{\pi}^*, \bar{\sigma}^*$ : 内部函数故  $uv^* \in {}^*N_{\mathcal{H}}$  依って  $N_{\mathcal{H}}^* = {}^*N_{\mathcal{H}}$ .

内部函数  $u$  に対して次ぎの称を scalar の内部函数  $g$  が存在するとき, この  $g$  を  $u$  の特性内部函数という. (i)  $uH^2_{\mathcal{H}} \supset gH^2_{\mathcal{H}}$   
(ii)  $uH^2_{\mathcal{H}} \supset tH^2_{\mathcal{H}}$  ( $t$ : scalar の内部函数)  $\Leftrightarrow gH^2_{\mathcal{H}} \supset tH^2_{\mathcal{H}}$ .

$f, g \in L^2$ ,  $f = g h, g = g' h'$  ( $g, g'$ : unitary,  $h, h'$ : 外部函数) に対して  $f \vee g = g \vee g', f \wedge g = g \wedge g'$  と定義する.

定理 10  $\dim \mathcal{H} < \infty$  とする. 内部函数  $u = (u_{ij})$  の特性内部函数  $g$  は

$$g = \frac{\det u}{(a_{11} \vee a_{12} \vee \dots \vee a_{1n}) \vee \dots \vee (a_{n1} \vee \dots \vee a_{nn})}$$

ここで  $(a_{ij})$  は  $u$  の余因数行列の転置行列.

証明. 簡単のために  $\dim \mathcal{H} = 2$  とする.  $uH^2_{\mathcal{H}} \supset tH^2_{\mathcal{H}}$  ( $t$ : scalar 内部函数) とすると  $\forall f, g \in H^2$  に対して  $h_1, h_2 \in H^2$  が存在して.

$$u_{11}h_1 + u_{12}h_2 = tf, \quad u_{21}h_1 + u_{22}h_2 = tg$$

$$\text{従って } (h_1 =) \frac{t(u_{22}f - u_{12}g)}{\det U}, \quad (h_2 =) \frac{t(u_{11}g - u_{21}f)}{\det U} \in H^2$$

( $\forall f, g \in H^2$ )

故に  $(u_{22}H^2 + u_{12}H^2) \subset \frac{\det U}{t} H^2$ , 従って  $u_{22} \vee u_{12}$  は存在して  
 $(u_{22} \vee u_{12}) H^2 \subset (\det U / t) H^2$ . 同様に  $(u_{11} \vee u_{21}) H^2 \subset (\det U / t) H^2$ .  
 従って  $\{(u_{22} \vee u_{12}) \vee (u_{11} \vee u_{21})\} H^2 \subset (\det U / t) H^2$ . 故に

$$t H^2 \subset \{ \det U / (u_{22} \vee u_{12}) \vee (u_{11} \vee u_{21}) \} H^2$$

依って  $t$  が  $U$  の特性内部函数である必要十分条件は

$$\det U = t \{ (u_{22} \vee u_{12}) \vee (u_{11} \vee u_{21}) \}.$$

特性内部函数が存在するとは限らないので“次ぎ”の称名問題を考える。 $H_{\mathbb{C}}^2$  の invariant subspace  $\mathcal{M}$  が all (analytic) directions を含むとは  $[F \in H_{\mathbb{C}}^2 \Rightarrow \exists f: \text{scalar ft. } f|_F \in \mathcal{M}]$  なることである。

問題  $H_{\mathbb{C}}^2$  の invariant subspace  $\mathcal{M} = U H_{\mathbb{C}}^2$  が all directions を含めば、 $\mathcal{M} \supset H_{\mathbb{C}}^2$  なる scalar 内部函数  $g$  が、従って内部函数  $U$  の特性内部函数が存在するか。

現在の所まだ満足できる答は与えられていない。得られていた結果は次ぎの称名なのである。

定理 11 任意の  $e \in \mathcal{H}$  に対して  $g|_e \in \mathcal{M}$  なる有限 Blaschke 積  $g_e$  が存在するならば  $\mathcal{M} \supset H_{\mathbb{C}}^2$  なる有限 Blaschke 積  $g$  が存在する。

$F \in H_{\mathbb{C}}^2$  に対して  $J$  を  $F$  の正値域函数とする。このとき

$H^2_{\mathcal{Y}} \cap M_{\mathcal{Y}} = E \cdot H^2$  ( $E \in H^2_{\mathcal{Y}}$ ,  $\|E(u^0)\| = 1$  a.e.) と書ける. この  $E$  を  $F$  に対する unitary 外部函数という. 定数函数  $e \in \mathcal{Y}$  に対する unitary 外部函数  $E$  に対して  $g[e] \in g[E] \cdot E \in M$ , 且  $\sup\{g[E] \in M \mid g H^2 \subset g[E] H^2\}$  なる内部函数とする.

補題 12 一次独立な  $y_1, y_2 \in \mathcal{Y}$  に対して  $g[y_1], g[y_2]$  は有限 Blaschke 積であるとする.  $g[f] = g[y_1] \wedge g[y_2]$  なる一次結合  $f = ay_1 + by_2$  が存在する.

証明.  $y_1, y_2$  の作る空間を  $\mathcal{Y}_0$  とし  $M \cap H^2_{\mathcal{Y}_0} = U H^2_{\mathcal{Y}_0}$  とすると  $U = (f_{ij})$  ( $\mathcal{Y}_0$  上 unitary)  $\mathcal{Y}_0^\perp$  上 0 である.  $f = ay_1 + by_2$  に対して  $[g f \in M \Leftrightarrow \exists g_1, g_2 \in H^2]$

$$\left[ \begin{pmatrix} f_{11} & f_{12} \\ f_{21} & f_{22} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} g_1 \\ g_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a g \\ b g \end{pmatrix} \right]$$

従って  $g f \in M$  なら  $g(a f_{22} - b f_{12}) / \det U, g(-a f_{21} + b f_{11}) / \det U \in H^2$ .

依って  $(\det U) H^2 \supset g(a f_{22} - b f_{12}) H^2, (\det U) H^2 \supset g(-a f_{21} + b f_{11}) H^2$

従って  $(\det U) H^2 \supset g\{(a f_{22} - b f_{12}) \vee (-a f_{21} + b f_{11})\} H^2$

故に  $g[f] = \det U / \{(a f_{22} - b f_{12}) \vee (-a f_{21} + b f_{11})\}$

特に  $g[y_1] = \det U / f_{22} \vee f_{21}, g[y_2] = \det U / f_{12} \vee f_{11}$

定理 10 から  $U$  の特性内部函数  $g$  は

$$g = \det U / (f_{11} \vee f_{12} \vee f_{21} \vee f_{22}) = g[y_1] \wedge g[y_2]$$

$g[y_1], g[y_2]$  は有限 Blaschke 積故  $g$  も有限 Blaschke 積也. 従って

$g^2 H^2 \subset (\det U) H^2 \subset g H^2$  から  $\det U$  も亦有限 Blaschke 積である.



今  $f = y_1 + by_2$  に対して  $g[f] \neq g$  とすると、或る有限 Blaschke 積  $p$  が存在して  $(f_{22} - bf_{12}) \vee (-f_{21} + bf_{11}) \in \text{divide } p$  かつ  $f_{11} \vee f_{12} \vee f_{21} \vee f_{22}$  は  $\text{divide}$  しない。  $p \in$  各因子に分けて考えれば或る  $|\lambda| < 1$  と整数  $k$  が存在して  $(z - \lambda / (1 - \bar{\lambda}z))^k$  は  $f_{22} - bf_{12}, -f_{21} + bf_{11}$  に  $\text{divide}$  するが  $f_{11}, f_{12}, f_{21}, f_{22}$  の何れも  $\text{divide}$  しない。従って例えば  $f_{12}^{(k)}(z) \neq 0$  とすればこのとき  $b = f_{22}^{(k)}(z) / f_{12}^{(k)}(z)$ 。この  $b$  は有限位しか存在しない。従って  $g[f] \neq g$  なる  $f = y_1 + by_2$  は有限位。

定理 11 の証明。仮定から各  $e \in \mathcal{M}$  に対して  $g[e]$  は有限 Blaschke 積になる。  $\mathcal{M}_n = \{e \in \mathcal{M} \mid g[e] \text{ の零点の位数 (重複度を数える) が } n \text{ 以下}\}$  とおくと  $\mathcal{M}_n$  は閉集合である。実際  $\mathcal{M}_n \ni f_m \rightarrow e$

とす。

$$g[f_m](e^{i\theta}) = \left( \frac{e^{i\theta} - \lambda_{m_1}}{1 - \bar{\lambda}_{m_1} e^{i\theta}} \right) \cdots \left( \frac{e^{i\theta} - \lambda_{m_n}}{1 - \bar{\lambda}_{m_n} e^{i\theta}} \right)$$

とおく。  $|\lambda| < 1$  に対して  $1 / (1 - \bar{\lambda} e^{i\theta})$  は外部函数だから

$$(e^{i\theta} - \lambda_{m_1}) \cdots (e^{i\theta} - \lambda_{m_n}) f_m \in \mathcal{M}$$

必要なら部分列を取って  $\lambda_{m_1} \rightarrow \lambda_1, \dots, \lambda_{m_n} \rightarrow \lambda_n$  とする。このとき

$$(e^{i\theta} - \lambda_1) \cdots (e^{i\theta} - \lambda_n) e \in \mathcal{M}$$

故に  $j$  に対して  $|\lambda_j| < 1$  なら有限 Blaschke 積  $g$  :

$$g(e^{i\theta}) = \left( \frac{e^{i\theta} - \lambda_1}{1 - \bar{\lambda}_1 e^{i\theta}} \right) \cdots \left( \frac{e^{i\theta} - \lambda_n}{1 - \bar{\lambda}_n e^{i\theta}} \right)$$

に対して  $g \in \mathcal{M}$ 。従って  $g[e]$  の零点の位数は  $n$  以下。故に  $e \in \mathcal{M}_n$ 。

$|\lambda_j| = 1$  なる  $j$  があるときは  $e^{i\theta} - \lambda_j$  は外部函数故にその数  $k$  に応

$\bar{U}$  上  $e \in M_{m \times k} \subset M_n$ . Baire の定理によりある  $m_k$ -近球  $\{x: \|x_0 - x_0\| < \epsilon\}$  を含む.  $y \in Y_e$  に対して  $x_0 + \frac{\epsilon}{2\|y\|} y \in m_k$  であるから  $y \in m_{2k}$ . 従って補題 12 により任意の  $n$  に対して  $g[x_n] = g[e] \wedge \dots \wedge g[e_n]$  なる  $x_n$  が存在する. このとき  $g[x_1]H^2 \supset g[x_2]H^2 \supset \dots$  であるから  $Y_e = m_{2k}$  より或る  $x_0$  に対して  $g[x_0] = g[x_{n+1}] = \dots$ . 故に  $\bigcap_{j=1}^{\infty} g[e_j]H^2 = g[x_0]H^2$ . 従って  $m \supset g[x_0]H^2_{ge}$ .

定理 13  $\dim Y_e < \infty$ ,  $U$ : 内部函数なら  $UH^2_{ge} = VH^2_{ge} \wedge WH^2_{ge}$   
 且  $\det U = (\det V)(\det W)$ ,  $\det V$ : Blaschke,  $\det W$ : singular なる内部函数  $V, W$  が存在する.

#### § 4 Invariant subspaces

問題  $Y_e$  ( $\dim Y_e > 1$ ) 上定義された有界線型作用素  $T$  は  $T Y_e \subset Y_e$ . 且  $\{0\} \neq Y_0 \subset Y_e$  なる閉部分空間  $Y_0$  を持つか.

これは  $T$  の invariant subspace の問題である. (i)  $\dim Y_e < \infty$  のときは答は肯定的. 実際  $T$  は固有 vector を持つが, これは一次元の invariant subspace を作る. (ii)  $\dim Y_e > \infty$  のときは肯定的. このときは  $0 \neq \varphi \in Y_e$  なる  $\varphi$  に対して  $\{T^n \varphi\}_{n=0}^{\infty}$  の closed linear span を考えればよい.

推移作用素  $S \in H^2_{ge} \rightarrow \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n X^n \rightarrow \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n X^{n+1} = X \left( \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n X^n \right)$

で定義し,  $H^2_{ge}$  に於ける  $S$  の共役作用素  $S^*$  とする:

$$S^*; H^2_{ge} \rightarrow \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n X^n \rightarrow \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_{n+1} X^n.$$

$H^2_{ge}$  の閉部分空間  $K$  と  $M = H^2_{ge} \ominus K$  に対して  $S^* K \subset K$

$\beta M \subset S$  とは同値. 従って  $\{0\} \subsetneq M \subsetneq \mathcal{H}$  なる  $\beta^*$ -invariant subspace  $M$  が見つけられること  $\Leftrightarrow M \subsetneq M_0 \subsetneq H_{\beta}^2$  なる  $(\beta)$ -invariant subspace  $M_0$  が見つけられること  $\Leftrightarrow$  は同値である.

以下に於いて  $T \in \mathbb{T}$   $\|T\| < 1$  なる  $\mathcal{H}$  上の有界線型作用素とし、対応  $A: \mathcal{H} \rightarrow H_{\beta}^2$  と

$$A: \mathcal{H} \ni \varphi \rightarrow F_{\varphi} = \sum_{n=0}^{\infty} (T^n \varphi) \chi^n = (I - \chi T)^{-1} \varphi \in H_{\beta}^2$$

で定義する.  $\mathcal{K}_T = A\mathcal{H}$  とおくと  $A$  は  $\mathcal{H}$  から  $H_{\beta}^2$  の閉部分空間  $\mathcal{K}_T$  の上への位相同型対応で  $AT = \beta^*A$ , 即ち  $\beta^*$  と  $T$  は unitary 同値.  $M_T = H_{\beta}^2 \ominus \mathcal{K}_T \in T$  の Rota 空間という [7].

$T$  の invariant subspace の存在性の問題が positive である必要十分条件は  $T$  の Rota 空間  $M_T$  が極大でない, 即ち  $H_{\beta}^2 \supsetneq M_0 \supsetneq M_T$  なる invariant subspace  $M_0$  が存在することである.

定理 14  $H_{\beta}^2$  の invariant subspace  $M$  が余次元 1 を持つ必要十分条件は或る  $(\lambda | \lambda| < 1 \text{ と } \varphi_0 \in \mathcal{H} (\varphi_0 \neq 0))$  に対して  $M = \{F \in H_{\beta}^2 \mid F(\bar{\lambda}) \perp \varphi_0 \text{ in } \mathcal{H}\}$  と表わせることである.

証明.  $\mathcal{K} = H_{\beta}^2 \ominus M$  とおくと  $\dim \mathcal{K} = 1$  とするときは  $0 \neq \psi \in \mathcal{K}$ ,  $\psi = \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n \chi^n$  とすれば、 $\beta^* \psi \in \mathcal{K}$  故  $\lambda \in \mathbb{C}$  が存在して

$$\beta^* \psi = \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_{n+1} \chi^n = \lambda \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n \chi^n$$

故に  $\varphi_{n+1} = \lambda \varphi_n (\forall n \geq 0)$  従って  $\varphi_n = \lambda^n \varphi_0 (\forall n \geq 0, \varphi_0 \neq 0)$ .  $\psi = (\sum_{n=0}^{\infty} \lambda^n \chi^n) \varphi_0 \in H_{\beta}^2$  なるから  $(\lambda | \lambda| < 1)$ . 従って  $\psi = \varphi_0 / (1 - \lambda \chi)$ .

逆に  $|\lambda| < 1$ ,  $\varphi_0 \in \mathcal{H}$  なる 3 組に対して  $\varphi = \varphi_0 / (1 - \lambda X)$  とおき  $\mathcal{K} = \{a\varphi \mid a \in \mathbb{C}\}$  とおくと  $\mathcal{K}$  は  $S^*$ -invariant な 1 次元空間である。  
 すると  $F \in \mathcal{M} \Leftrightarrow$

$$0 = \int (\varphi, F) d\sigma = \int (\varphi_0, (1 + \bar{\lambda}X + \bar{\lambda}^2 X^2 + \dots) F) d\sigma$$

$$F = \sum_{n=0}^{\infty} \bar{\lambda}^n \varphi_n \quad \text{故}$$

$$0 = \int (\varphi, F) d\sigma = (\varphi_0, \sum_{n=0}^{\infty} \bar{\lambda}^n \varphi_n) = (\varphi_0, F\bar{\omega})$$

換言すれば  $F \in \mathcal{M} \Leftrightarrow F\bar{\omega} \perp \varphi_0$  in  $\mathcal{H}$ .

定理 15  $H_{\varphi_0}^2$  の invariant subspace  $\mathcal{M}$  が極大であるとき、 $\mathcal{M} \supset g H_{\varphi_0}^2$  ( $g$ : 内部函数) なる  $\text{codim } \mathcal{M} = 1$  のときに  $g$  は single Blaschke factor になるとする。

証明.  $g H_{\varphi_0}^2$  が  $\mathcal{M}$  の極大になるには scalar-内部函数  $g$  をとる。  
 $g$  が single factor であるならば  $g = pr$  ( $p, r$  は定数でない内部函数) と書ける。  
 $\mathcal{M}' = \{F \in H_{\varphi_0}^2 \mid pF \in \mathcal{M}\}$  とおくと  $\mathcal{M} \subset \mathcal{M}' \subset H_{\varphi_0}^2$ 。  
 $\mathcal{M}' = H_{\varphi_0}^2$  ならば  $p H_{\varphi_0}^2 \subset \mathcal{M}$  となり  $g$  の極大性に反する。  
 $\mathcal{M} = \mathcal{M}'$  ならば  $F \in r H_{\varphi_0}^2$  なる  $F \notin \mathcal{M}$  を選べば、 $pF = pr(\bar{r}F) = g(\bar{r}F) \in g H_{\varphi_0}^2 \subset \mathcal{M}$  故に  $F \in \mathcal{M}' = \mathcal{M}$  となり矛盾である。  
 故に  $g$  は single factor の勿論特異であるから Blaschke factor である。依りて  $g(z) = (z - \lambda) / (1 - \bar{\lambda}z)$  と書ける。  
 ところで  $\tau: F \in H_{\varphi_0}^2 \rightarrow F\bar{\omega} \in \mathcal{H}$  なる対応をとると  $\tau(\mathcal{M}) = \mathcal{H}'$  は  $\mathcal{H}$  の内部分空間で、 $\tau(g H_{\varphi_0}^2) = \{0\}$ 。  
 $\mathcal{H}'$  が  $\mathcal{H}$  の内部分空間ならば  $\tau^{-1}(\mathcal{H}')$  は invariant である。故に  $\tau^{-1}(\mathcal{H}') \leftrightarrow \mathcal{H}'$  は  $H_{\varphi_0}^2$  の  $g H_{\varphi_0}^2$  を含む invariant subspace と  $\mathcal{H}$  の内部分空間との間の 1-1

対応を与えらる。従て、極大な  $M$  に対応する  $\mathcal{H}_0$  は  $\mathcal{H}$  の部分空間として極大でなければならず、このとき  $\text{codim } \mathcal{H}_0 = 1$  故  $\text{codim } M = 1$ .

系 16  $M$  が極大で  $\text{codim } M \neq 1$  ならば各  $F \in M$  に対する unitary 外部函数  $E$  は  $M$  に属する。

証明.  $F \in E \cdot H^2$  故  $F = g \circ h E$  ( $g$ : 内部,  $h$ : 外部函数) と書ける。 $h$  が外部函数だから  $gE \in M$ . 今  $N = \overline{gM} \cap H_{\mathcal{H}_0}^2$  とおくと  $M \subset N \subset H_{\mathcal{H}_0}^2$ .  $N = H_{\mathcal{H}_0}^2$  ならば  $\overline{gM} \supset H_{\mathcal{H}_0}^2$  故  $M \supset gH_{\mathcal{H}_0}^2$  となり、定理 15 から  $\text{codim } M = 1$ . これは矛盾で、従て  $M = N$  故  $E = \overline{g}gE \in M$ .

定理 17  $M$  が極大ならば  $E \in H_{\mathcal{H}_0}^2$ ,  $\|E(e^{i\theta})\| = 1$  a.e. が存在して

$$M = \{ F \in H_{\mathcal{H}_0}^2 \mid (F, E) \in H^2 \}$$

証明.  $M = \cup H_{\mathcal{H}_0}^2$  とする。凡ての  $e \in \mathcal{H}$  に対して  $ue$  が定数ならば  $M = H_{\mathcal{H}_0}^2$  となる。従て  $ue = E$  が定数でない  $u$  なる  $e \in \mathcal{H}$ ,  $\|e\| = 1$  が存在する。今  $\mathcal{H}$  の base  $\{e_j\}$   $\sum e = e_1$  となる様にすれば

$$u = \begin{pmatrix} k_1 \\ k_2 \\ \vdots \\ * \end{pmatrix}$$

とおくと  $E = ue = \sum_{j=1}^{\infty} k_j e_j$ . 所て明らかに  $M \subset M_{(E)} \subset H_{\mathcal{H}_0}^2$ . 此

如て  $M_{(E)} = \{ F \in H_{\mathcal{H}_0}^2 \mid (F, E) \in H^2 \}$ .  $M_{(E)} = H_{\mathcal{H}_0}^2$  ならば  $\forall F \in H_{\mathcal{H}_0}^2$ ,  $F = \sum_{j=1}^{\infty} f_j e_j$  に対して  $(F, E) = \sum f_j \overline{k_j} \in H^2$ . 従て  $\overline{k_j} \in H^2$  ( $\forall j \geq 1$ )

故に  $k_j$  は  $\mathbb{R}$  上定数となり、これは  $E$  が定数でないという事に反する。故に  $M = M_{(E)}$ .

あとで見れば  $\mathcal{H}$  の Rota 空間  $M_{\mathcal{H}}$  は full range である。故に

$M_\pi = U_\pi H_{ge}^2$  ( $U_\pi$ : 内部函数) と表現できる. 従って  $M_\pi \subsetneq M_0 \subsetneq H_{ge}^2$  なる invariant subspace  $M_0$  が存在する必要十分条件は  $U_\pi = V \cdot W$  ( $V, W$ : 定数でない内部函数 - 但し  $\text{codim } M_\pi = 1$  のときは(定数で)

よい) の factorization が出来ることである. 従って  $\pi$  の invariant subspace の存在性の問題は内部函数, 特に Rota 空間  $M_\pi$  を表現する内部函数  $U_\pi$  (これを  $\pi$  の Rota 内部函数という) の factorization の問題に帰着される. この問題に就いては [3, 4] に詳しい.

定理 18  $\dim \mathcal{H} < \infty$  とする.  $\text{codim } M > 1$  ならば  $M$  は極大でない. 或は同値だが, 自明な場合を除いて内部函数は factorization できる.

### §5 Rota 空間と Potapov 空間.

命題 19  $M_\pi = \{ F \in H_{ge}^2 \mid F = \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n \chi^n, \sum_{n=0}^{\infty} (\pi^*)^n \varphi_n = 0 \}$

定理 20  $M_\pi = (\chi - \pi^*) H_{ge}^2$

証明. 定義から  $M_\pi = \{ F \in H_{ge}^2 \mid \int (F, (1 - \chi\pi)^{-1} e) d\sigma = 0 \ \forall e \in \mathcal{H} \}$ .  
 $F \in M_\pi$  に対して  $G \equiv (1 - \chi^{-1}\pi^*)^{-1} F \in H_{ge}^2$  なる  $\chi^{-1}G \in H_{ge}^2$  故に  $F = (\chi - \pi^*) \chi^{-1}G \in (\chi - \pi^*) H_{ge}^2$ .  $G \in H_{ge}^2$  を示す.  $G = \sum_{n=0}^{\infty} \varphi_n \chi^n$  とすると  
 $F = (1 - \chi^{-1}\pi^*) G = \sum_{n=0}^{\infty} (\varphi_n - \pi^* \varphi_{n+1}) \chi^n$ ,  $F \in H_{ge}^2$  故  $\varphi_n = \pi^* \varphi_{n+1}$  ( $n = -1, -2, \dots$ ). 従って  $F \in M_\pi$  なるから  $(\varphi_0, e) = \int (G, e) d\sigma = \int ((1 - \chi^{-1}\pi^*)^{-1} F, e) d\sigma = 0 \ (\forall e \in \mathcal{H})$  故に  $\varphi_0 = 0$ . 従って  $\varphi_{-1} = \pi^* \varphi_0 = 0$ ,  $\varphi_{-2} = \pi^* \varphi_{-1} = 0, \dots$ . 故に  $G \in H_{ge}^2$ . 逆向きの包含関係は容易である.

系 21  $M_T$  は full range である。

系 22  $T$  が正規作用素なら  $U_T = (X - T^*)(1 - XT)^{-1}$

証明.  $T$  が正規であるから  $(X - T^*)(1 - XT)^{-1}$  は unitary である。

勿論内部函数となる。  $(1 - XT)^{-1} H_{T^*}^2 = H_{T^*}^2$  となるから定理 20 から

$$M_T = (X - T^*) H_{T^*}^2 = (X - T^*)(1 - XT)^{-1} H_{T^*}^2.$$

命題 23  $U_T = U_0 + X(1 - XT)^{-1} U_1$  此処で  $U_0, U_1$  は定数作用素。

定理 24  $\dim \mathcal{H} = N < \infty$  とする。  $T^*$  の特性多項式を  $\prod_{j=1}^N (z - \lambda_j)$

とするとき

$$\det U_T(e^{i\theta}) = \prod_{j=1}^N \frac{e^{i\theta} - \lambda_j}{1 - \bar{\lambda}_j e^{i\theta}}$$

証明. 定理 20 から  $U_T H_{T^*}^2 = (e^{i\theta} - T^*) H_{T^*}^2$ . 従って  $\{\det(e^{i\theta} - T^*) / \det U_T\}$  は  $H^\infty$  の invertible element、故に外部函数。  $\det(e^{i\theta} - T^*)$  は  $T^*$  の特性多項式である。外部函数は零点又は極を円板内に持つから  $\det U_T$  と  $\det(e^{i\theta} - T^*)$  は同じ重複度の零点を持つ。この極点性質を持つ内部函数は  $\prod_{j=1}^N \frac{e^{i\theta} - \lambda_j}{1 - \bar{\lambda}_j e^{i\theta}}$  の絶対値 1 の定数倍だけである。

定理 25  $\dim \mathcal{H} < \infty$  とし、  $T^*$  の最小多項式を  $\prod_{j=1}^r (z - \lambda_j)$  とする。

$U_T$  の特性内部函数は

$$g(e^{i\theta}) = \prod_{j=1}^r \frac{e^{i\theta} - \lambda_j}{1 - \bar{\lambda}_j e^{i\theta}}$$

証明.  $\prod_{j=1}^r (1 - \bar{\lambda}_j e^{i\theta})^{-1}$  は外部函数だから  $g H_{T^*}^2 = \prod_{j=1}^r (e^{i\theta} - \lambda_j) H_{T^*}^2$ .

まず  $M_T \supset \mathcal{H}_{T^*}^2$  を示す。  $\sum \varphi_n z^n$ ,  $\sum \|\varphi_n\|^2 < \infty$  に対して

$\prod_{j=1}^r (z^{i_0} - \lambda_j) \sum_{n=0}^{\infty} a_n z^{in_0} \in M_T$  を示せばよい.  $M_T$  は invariant 故この  
 ためには  $\forall \varphi$  に対して  $\prod_{j=1}^r (z^{i_0} - \lambda_j) \varphi \in M_T$  を示せばよい. 命題 19  
 によりこのことは  $\sum_{n=0}^{\infty} a_n (T^*)^n \varphi = 0$  と同値である (但し  $\prod_{j=1}^r (z^{i_0} - \lambda_j)$   
 $= \sum_{n=0}^{\infty} a_n z^{in_0}$  とある). 故に  $\sum a_n z^{in_0}$  は  $T^*$  の最小多項式故これ  
 は成立する. 従って  $M_T \supset \mathfrak{g} H_{\mathfrak{g}}^2$ . 今  $M_T \not\supset p H_{\mathfrak{g}}^2 \supset \mathfrak{g} H_{\mathfrak{g}}^2$  ( $p$ : scalar  
 内部函数) とすると  $p$  は有限 Blaschke 積でなければならぬ.  

$$p(z^{i_0}) = \prod_{j=1}^k \frac{z^{i_0} - \beta_j}{1 - \bar{\beta}_j z^{i_0}} \quad (k \leq r)$$
 とおく. このとき  $\prod_{j=1}^k (1 - \bar{\beta}_j z^{i_0})^{-1}$  は外  
 部函数故  $M_T \not\supset p H_{\mathfrak{g}}^2 = \prod_{j=1}^k (z^{i_0} - \beta_j) H_{\mathfrak{g}}^2$ . 特に  $\forall z \in \mathfrak{g}$  に対して  
 $\prod_{j=1}^k (z^{i_0} - \beta_j) z \in M_T$ . 命題 19 により  $\prod_{j=1}^k (T^* - \beta_j) = 0$ . 故に  $\prod_{j=1}^r (z^{i_0} - \lambda_j)$   
 が  $T^*$  の最小多項式故  $k=r$  となり結局  $p = \mathfrak{g}$ .

Rota 空間の応用の一つとして次手の命題を挙げておく.

命題 26  $\dim \mathfrak{g} = \infty$  ならば full range を持つ  $H_{\mathfrak{g}}^2$  の disjoint な  
 invariant subspaces の uncountably family  $\{M_\alpha\}$  が存在する.

証明.  $T^*$  の Rota 空間  $M_{T^*}$  は  $H_{\mathfrak{g}}^2$  の full range を持つ invariant  
 subspace である. 更に  $T, U$  が disjoint な値域を持つ 相互 1-1 有界線型  
 作用素ならば  $M_{T^*} \cap M_{U^*} = \{0\}$ . 従って  $\{ \cdot \}$  作用素の uncountably  
 family を示せばよいが. これは容易である.

Potapov [6] によれば  $T$  に関連するもう一つの内部函数が  
 ある

$$U_T(z^{i_0}) = (1 - T^* T)^{-\frac{1}{2}} (z^{i_0} - T^*) (1 - \lambda T)^{-1} (1 - T T^*)^{\frac{1}{2}}$$

は内部函数である. この  $U_T$  は Potapov 内部函数と  $U \in H_{\mathfrak{g}}^2$  である.



Potapov 空間という。これは  $B; \mathcal{H} \ni e \rightarrow \mathcal{H}_e =$

$(1-T^*T)^{-\frac{1}{2}} \sum_{n=0}^{\infty} (T^n e) \chi^n \in \mathcal{H}_e^2$  なる対応を考えるとき

$\mathcal{V}_T \mathcal{H}_e^2 = \mathcal{H}_e^2 \ominus B\mathcal{H}$  なる空間で、 $T$  についての

invariant subspace の存在性の問題は  $T$  の Potapov

空間が  $\mathcal{H}_e^2$  の invariant subspace として極大でない

ということと同値になる。系 22 から  $T$  が正規作用素なら

その Rota 空間と Potapov 空間は一致する。更に

定理 27  $\dim \mathcal{H} = N < \infty$  なら  $\det U_T = \det V_T$  であり、 $U_T$  と

$V_T$  の特性内部関数は同一である。

証明.  $\det V_T = \det (1-T^*T)^{-\frac{1}{2}} \det (\chi - T^*) \det (1 - \chi T)^{-1} \det (1 - T T^*)^{\frac{1}{2}}$

最初と最後の因子は定数で、第 2 の因子は  $T^*$  の特性多項式、

第 3 の因子は

$$\det (\chi (\chi^{-1} - T)^{-1}) = \chi^{-N} \left[ \prod_{j=1}^N (\chi^{-1} - \bar{\lambda}_j) \right]^{-1} = \prod_{j=1}^N (1 - \chi \bar{\lambda}_j)^{-1}$$

最初の主張が定理 24 から従う。  $\mathcal{V}_T \mathcal{H}_e^2 = (1-T^*T)^{-\frac{1}{2}} \mathcal{U}_T \mathcal{H}_e^2$  故に

$[\mathcal{V}_T \mathcal{H}_e^2 \supset \mathcal{H}_e^2 \Leftrightarrow \mathcal{U}_T \mathcal{H}_e^2 \supset \mathcal{H}_e^2]$  なるから後半の主張が出る。

定理 28 Rota 空間  $\mathcal{M}_T$  (或は Potapov 空間) が all directions

を含む必要十分条件は  $T$  が polynomial equation  $P(T) = 0$  を満

足すことである。

定理 3 は [12], 定理 28 は [11] に証明がある。その他の証明を

省略した定理の証明は [3] で与えられている。此処で与えた証

94

明は [4, 8, 9, 11] 等による。作用素函数の factorization の問題は [3], 内部函数に就いての他の結果は [10] 等に見られる。

## 文 献

- [1] W. B. Arveson; Analyticity in operator algebras, Amer. Journ. Math., 89 (1967) 578-642.
- [2] M. Cambern; Analytic Range Functions, Journ. Math. Anal. & Apply., 12 (1965) 413-424.
- [3] H. Helson; Lectures on Invariant Subspaces, Academic Press, N.Y., 1964
- [4] \_\_\_\_\_; Sous-Espaces Invariants, Publications Mathématiques d'Orsay, Année 1966-67.
- [5] Y. Ohno; Simply invariant subspaces, Tohoku Math. Journ., 19 (1967), 368-378.
- [6] V. P. Potapov; The multiplicative structure of  $J$ -contractive matrix functions, Amer. Math. Soc. Transl. 15 (1960), 131-245.
- [7] G.-C. Rota; Note on the invariant subspaces of linear operators, Rendiconti del Circolo Matematico di Palermo (2) 8 (1959), 182-184.
- [8] M. J. Shurman; Operators and Inner Functions, Pacific Journ. Math., 22 (1967) 159-170.

- [9] \_\_\_\_\_; Disjoint Invariant Subspaces, to appear.
- [10] \_\_\_\_\_; A spectral theory for inner functions, to appear.
- [11] \_\_\_\_\_; Invariant subspaces containing all analytic directions, to appear.
- [12] T.P. Srinivasan; Doubly invariant subspaces, Pacific Journ. Math., (4 (1964) 701-707.